



海妻径子

『近代日本の父性論とジェンダー・ポリティクス』

(2004 作品社 402 P ISBN4-87893-632-0 C1036 3,400 円+税)



井上輝子

近代日本におけるジェンダー・ポリティクスについての研究は、従来「良妻賢母主義」「母性主義」等、女性の役割に関する言説・教育・運動・政策等の観点から進められてきており、「父性」に焦点を当てた研究は少ない。本書は、日本における「父性」論の歴史的展開過程を本格的に分析した最初の研究といってよい。

本書は、明治30年代後半から大正期を中心とした、日本における近代家族の形成期を舞台に展開された父性論の構図を俯瞰し、そのジェンダー・ポリティクスを明らかにする。

本書は本文318ページ、資料編を加えると402ページに及ぶ大著であり、第Ⅰ部「父性・父親」は、どのように研究されてきたのか 第Ⅱ部 国家のための“男の子育て”——「良夫賢父」論 第Ⅲ部 父をして物質上の奴隷たらしむるなかれ——一條忠衛の父性論の3部構成から成り、特に著者の発掘した一條忠衛の父性論について詳述した第Ⅲ部に、量的にも質的にも力点が置かれている。

著者の論述展開にそって、本書の内容を概観しておく。第Ⅰ部では、父性・父親についての心理学的・社会学的研究（第1章）及び歴史学的研究（第2章）を概観した上で、本書の視座（第3章）として、近代日本における父性論に、①近代的性別分業に立つ父性論 ②「良夫賢父」論 ③近代的性別分業批判の父性論の3つの流れがあることを指摘する。

第Ⅱ部では「良夫賢父」論に焦点を当て、「良夫賢父」論の執筆者略歴と論旨（第4章）及び「良夫賢父」論の論点（第5章）を、整理・検討している。著者によれば、「良夫賢父」論とは、父親による母親の子育てへの精神的な援助や軽い家事・育児分担を主張する父性論を指す。東京帝国大学名誉教授加藤弘之から、家庭小説の著者として知られるジャーナリスト村井弦斎まで、教育界・ジャーナリズム界の主要人物たちが関与し、明治末年から昭和初期にいたる時期に、

一定の影響力を有した。

著者は、「良夫賢父」論の共通点として、①国家のための子育て ②男子教育への期待 ③男性規範への疑義を挙げ、次のような評価を下す。「家庭や子どもを重視することを女々しいとみなす従来のジェンダー規範を批判し、男性規範にゆらぎをもたらす『良夫賢父』論は、“私”領域を重視し近代的性別分業批判の父性論へと踏み込んだように見えながら、子育てを国家貢献と位置づけるものであった点においては近代的性別分業観にもとづく父性論と同様に、“公”領域優先の論理の枠内にとどまるものであった」（123ページ）

第Ⅲ部は、一條忠衛の父性論の形成過程（第7章）、一條忠衛の父性論の論点（第8章）、父性論の歴史的展開における一條忠衛の意義と限界（第9章）及び終章からなり、ここで著者は、近代的性別分業批判の父性論として、最も高く評価する一條忠衛の父性論を、詳細に分析する。一條忠衛は、従来ほとんど研究がなく、著者によって初めてその著述活動の全容が明らかにされた思想家である。

一條忠衛は、大正3—7（1914-1918）年に『六合雑誌』の婦人問題欄の主筆を務めたこと以外には、経歴がほとんど明らかでない。ご遺族の強い要望により公表できないということで、「東北農村の素封家の出身で進学のため上京後、著述活動をはじめた」とのみ紹介されている。著者は、大正期に一條が関わった可能性がある判断した11種類の雑誌の復刻版の目次と人名索引から、一條の筆になるとと思われる作品を抽出し、計158点の著作目録を作成し、本書の巻末に掲載している。

著者によれば、一條の父性論は、①近代的性別分業肯定期（大正3—4年）②「父性中心説」提唱期（大正5—6年）③「父性保護」提唱期（大正7—8年）④近代的性別分業批判期（大正9—10年）と、徐々に形成されていった。



大正初期に「自我の可能性」追求の一環として父性に言及を開始した段階では、一條の父性論は、近代的性別分業肯定論であったが、大正5年に母性保護論争に関与したのを機に、明確な近代的性別分業批判へと向かうことになる。一條は、与謝野晶子の「非母性中心説」に呼応して『六合雑誌』で、「母性中心説は父性中心説と併せて考察せねばならない」との主張を展開する。「夫婦の相互扶養」の原則を掲げ、市場労働と家事労働のいずれの領域における父母の分業をも否定し、女性就労を促進し、家事・育児労働に父親が従事することを当然視するのであった。

著者は第8章で、一條の父性論の論点を、1) “私”領域の重視 2) 「人格の実現」の追求の2点に整理し、前者については与謝野晶子と、後者については福沢諭吉と比較しながら、詳しい検討を加える。

まず1) について、①性差の極小視による“私”領域重視、②市場／家事・育児労働双方での男女協同を主張する点で、一條の議論は与謝野とほぼ共通する。だが、与謝野が子どもの発達保障の面から父親の子育てを位置づけるのに対し、一條は父親自身の自己実現として子育てに意義を見出す点が特徴である。

2) 「人格の実現」追求の一環として父親の子育てを主張する点で、一條の父性論には福沢の影響が見られる。ただし、福沢が有産市民階級の家父長による「私権」行使の1つとして子育てを位置づけるのに対し、一條の場合には、育児を通じての自己実現を、ア priori な「当為」としての「人格権」の行使と考える点で異なる。

第9章では、一條の父性論の意義と限界を次のようにまとめている。1) 子育てを国家貢献と位置づける点で、「良夫賢父」論も、“私”領域を“公”領域に従属させて捉えるのに対して、一條の場合には、“公”領域優先批判を貫徹した点、2) 対極的性差観を放棄し、「甲斐性」という、男性の市場労働への囲い込みを拒否した点が、一條の特長である。だが、3) 「一夫一婦」を当為とし、夫婦の枠内に閉塞された父性主張であった点、また、現実改革への有効な戦略を提示しえなかった点が、一條の限界であった。

以上概観したように、本書は、一條忠衛を軸にしなが、近代日本の父性論の見取り図を示した書である。戦前の日本社会において、家父長制的父性論を批判する父性論が、多様に展開されていた事実を明らかにした点で、本書の意義は大きい。数年来、日本では父親

復権論が喧しいが、数十年前にすでに、父性のあり方をめぐってなされた諸論議を踏まえた上での、冷静な議論が必要とされよう。本書は、そうした議論に、有用な道具立てと道筋を提供する作品といえる。

それ以上に本書の主要な功績は、これまでほとんど言及されることのなかった一條忠衛の父性論の全体像を明らかにしたことにある。大正期とは比較にならない規模で、近代的性別分業とそのイデオロギーが社会に貫徹している現在、それを超える父性論を提示した一條の議論は、今こそ顧みられる必要がある。著述目録を作成する作業から始め、一條の父性論を丹念に考察した努力は、大なる評価に値しよう。

ただ残念なのは、本書が一條の実生活に一切触れていないことである。一條が時代に先駆け、突出した父性論を提唱した背景に、彼自身の個人的履歴や生活経験が作用している可能性が全く無かったとは考えにくい。ご遺族の意思に配慮したことは充分理解できるが、固有名詞等の個別具体的情報は伏せたとしても、経済的にはどのような状態であったのか、結婚はしていたのか、子どもはいたのか等々、彼の実人生を示唆する情報が示されていれば、一條理解がより深まったのではないかと、惜しまれる。本書の表紙に一條と思しき父と娘の写真が掲載されているのは、著者が公表できた最大限のメッセージかもしれないが。

また、一條の父性論が、どのような人々に受容され、影響を与えたのか、教育界や言論界における、近代的性別分業に基づく父性論や「良夫賢父」論とのせめぎ合いは、具体的には、どのように進化したのかといった、いわばジェンダー・ポリティクスの現実的展開が、本書では言及されていないことも、気になる点である。一條の父性論の主たる発表場所であった、雑誌『六合雑誌』『廓清』の読者層は、どのような人たちであり、一條の主張に対する反応はどのようなものであったのかを、ぜひ知りたいものである。彼の突出した父性論は、ある範囲で影響力を持ったのか、それとも全く無視され続けたのか、そして、支持されまたは無視された理由はなにか、といった事柄は、思想のポリティクス分析にとって、不可欠なのではないだろうか。

もちろんこれらは、今後の課題であり期待であって、本書の意義を損ねるものではない。

(いのうえ・てるこ 和光大学人間関係学部教授)